

●第十九回新選組書展の課題について

課題①「誠」

新選組の袖章や隊旗などに使われた、新選組を象徴する一文字。例年の課題です。

課題②「元込五打相発し実二弁利宜 候」

今回の「候文」の課題は、鳥羽・伏見の敗戦後に土方歳三と会った佐藤彦五郎が、近況や、土方から聞いた戦況を、当時日光にいた井上松五郎（井上源三郎の兄）に伝える書状の一部です。土方から聞いた話として重傷（御陵衛士の残党に襲撃されたため）の近藤に代わり土方が隊長として出陣したが敗れ死傷者が多く出たこと、沖田が重病で参戦できなかったこと、松五郎の息子の泰助は無事であることを伝えますが、松五郎の弟、源三郎の戦死については触れていません。

さらに土方から「新式の元込銃（後装式施条銃）は、新選組や彦五郎ら日野宿農兵隊が使っているゲベール銃（前装式滑腔銃）とは比べ物にならないほど高性能だ」と聞いた彦五郎は、早速横浜に行つて新型の元込銃二十挺を入手しました。それを試射してみた感想として「元込銃はゲベール銃の五倍の速さで射撃可能で、実に便利で良いものだ」と感嘆しています。これから始まるかもしれない新政府との戦いに向けての意気を示すものであったのかもしれない。

課題③「武田観柳斎」

第十三回書展の「土方歳三」以来「近藤勇」「沖田総司」「永倉新八」「斎藤一」「松原忠司」と続いてきた新選組人名シリーズの第七弾は、新選組五番隊組長などをつとめた武田観柳斎です。

武田は本名を福田廣といい、出雲国（島根県）出身と考えられています。甲州流軍学を修めて武田と名乗りました。新選組には文久3年（1863年）に京都で入隊、兵法や学問に明るいことから新選組では軍師として活動したといわれています。元治元年（1864年）の近藤による江戸での隊士募集にも同行するなど、近藤の側近となっていました。子母澤寛によれば、上にへつらい、下には尊大で人望は薄かったとされ、現在でもそのように描かれることが多いです。

名声で上回る参謀・伊東甲子太郎の入隊や新選組の軍制の和式から洋式への転換などで軍師としての立場が揺らぎ、その後伊東甲子太郎ら御陵衛士が分離した際には後から加わろうとするも断られてさらに立場が悪化したなどのこともあり新選組を脱退しましたが、最終的に粛清されました。これは脱退直後に倒幕派と接触するなどの節操の無さがあつたことが原因だと言われています。

課題④「公武」

第十六回の「黒船」から始まった幕末用語シリーズの第四弾は、「公武」です。開国による混乱を収めるために反対派を厳しく弾圧した大老井伊直弼でしたが、桜田門外の変により暗殺され、幕府の権威は失墜、京都では倒幕派による「天誅」というテロが横行し治安が極度に悪化しました。

そこで幕府は失墜した権威を立て直すため、「公武」の合体を目指しました。公とは朝廷（公家）を、武とは幕府（武士）を表し、朝廷と幕府が協力して国難に当たること

を公武合体といいます。具体的には将軍徳川家茂と孝明天皇の妹和宮の婚姻により朝廷結びつきを強めようとした。しかし、幕府の動きは朝廷を蔑ろにするものとしてさらなる反発と治安の悪化を招き、ここに、治安対策として浪士組が作られる素地ができていったのです。



佐藤彦五郎書状 大意

正月3日から6日まで伏見で戦いがあつた件につき、近藤・土方から聞いた話を以下にお伝えします。
昨年末に上様（徳川慶喜）が大坂（大阪）に下られ、1月2日に会津藩、伝習隊他が京都に向かいました。
（中略…戦いの経過を記す）

近藤は御陵衛士の残党に襲撃されて負傷し、重病の沖田とともに大坂町奉行所で療養しており、伏見には土方を隊長として出陣、粉骨砕身戦い続けるも死傷者約50人を出して敗退し、2隻の船に分乗して12日と15日に品川に到着しました。近藤と沖田は御典医松本良順先生のところを療養し、18日に私（彦五郎）と糟屋良循（歳三の実兄）とで面会いたしました。

（中略…新政府軍の大坂進軍や輪王寺宮や和宮による慶喜赦免の嘆願、慶喜隠居の巷説など上方・江戸の状況や風聞を記す）

右のとおり土方から聞いた話のあらましをお伝えしましたが、さらに上州（野州の誤伝か）の倒幕浪士拳兵事件の件についての書も見ることができました。このような混乱の中にあつても江戸では芝居が大盛況となつていますが、一方で江戸から脱出しようという人々もいて大変な騒ぎとなっております。

当方ではやっと元込銃を20挺入手し、農兵隊の武器としました。元込銃はゲベール銃を1発撃つ時間で5発も撃つことができ、大変便利で良いものです。また、新規の農兵を20人ほど取り立て、5日から訓練を始めることにしています。

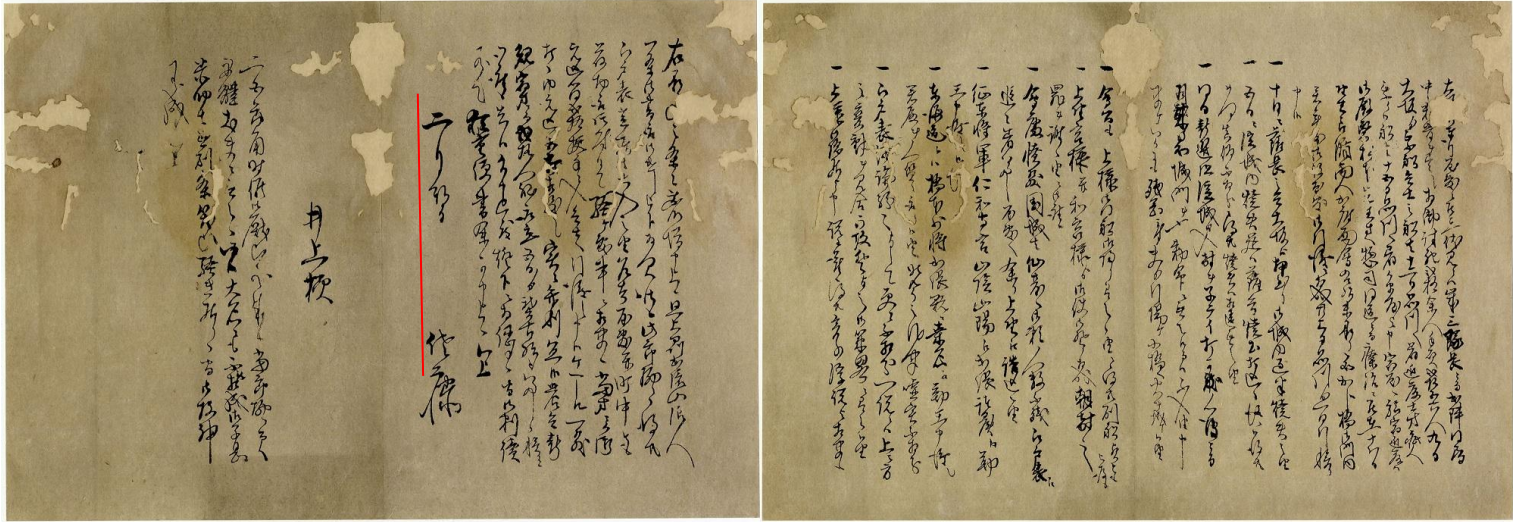
まずはお知らせいたしますが、後日詳細をお知らせすることもあるかと存じます。

二月朔（一）日

井上様

佐藤

追伸 ご息泰助は無事に江戸に戻り、元気にしていますのでご安心ください。



佐藤彦五郎書状 井上松五郎宛（部分／慶応4年（1868年）2月） 井上源三郎資料館所蔵